



課程博士の学位授与申請に係わる審査報告書

学 籍 番 号	15DL1601
氏 名 (本 籍)	山 口 昌 志 (愛 知 県)
学 位 の 種 類	博 士 (日 本 文 化)
報 告 番 号	甲 第 110 号
学 位 授 与 年 月 日	2021 (令 和 3) 年 3 月 20 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
論 文 題 目	キリシタン時代における異文化受容に関する研究

審 査 委 員	主 査	山 田 邦 明
	副 査	神 谷 智
	副 査	廣 瀬 憲 雄
	副 査	小 野 賢 一



2021 (令 和 3) 年 2 月 12 日
愛知大学大学院文学研究科

審査の結果の要旨

本論文は、16世紀末・17世紀初頭という時代に、キリスト教という異文化に対して日本人がどのように接したかという問題について、日本人修道士でありながら棄教して論難書を執筆した不干ハビアンや、仏教界の戒律復興運動の出発点を作った明忍といった人物に焦点を当てながら論じたものである。

論文の構成は以下の通りで、イエズス会とハビアンにかかわる「第一部」と、明忍にかかわる「第二部」に分かれ、個別の論考が配置されている。

序論

第一部 日本人キリシタンに見る受容と離脱

第一章 不干ハビアンの背教について

第二章 16世紀末日本イエズス会における修道士の退会事例について

第三章 キリシタンの棄教を表す用語について—「ころぶ」「そむく」『つまずく』—

第二部 明忍律師による戒律復興運動と異文化受容

第一章 槇尾平等心王院明忍律師に関する基礎的研究

第二章 明忍律師の事跡と戒律重視の思想的背景

第三章 明忍律師の周辺人物について

結論

「第一部 日本人キリシタンに見る受容と離脱」では、日本人とキリスト教とのかかわりについて、いったん信徒となりながら途中で信仰から離れた人々に注目して考察を加えている。

「第一章 不干ハビアンの背教について」では、1608年に棄教したハビアンの背教の動機について、これまで提示されている諸説を検討したうえで、女性問題が中心的動機であるとし、前提的に無条件で貞潔を善とするキリスト教の思想をハビアンは拒絶したのだと結論づけている。「第二章 16世紀末日本イエズス会における修道士の退会事例について」は、ハビアンと同じように信仰を棄ててイエズス会から退会した人々について、二つの退会者名簿をもとに分析を加えたものだが、事情により退会しても、その後会に戻ってくる可能性も残されていたとの指摘もなされている。「第三章 キリシタンの棄教を表す用語について」は、いったんキリスト教を受容した人が信仰を棄てることを意味する「ころぶ」という言葉に注目して、この特有の用例が成立した事情を考察したもので、「ころぶ」には「口先だけの棄教」「一次的な棄教」というニュアンスがあり、信仰に立ち戻ることもありうるし、弾圧する側もそれで充分と考えていたこともあって、この用例が一般化したのではないかと推測している。

「第二部 明忍律師による戒律復興運動と異文化受容」では、戒律復興運動の出発点を作った明忍という律僧に焦点を当て、その生涯を辿りながら、明忍が戒律を重視するに至った思想的背景を論じている。「第一章 槇尾平等心王院明忍律師に関する基礎的研究」は、評伝類の整理と分析を通じて明忍の事跡を追ったもので、朝廷の官吏である中原家の出身で清原家に迎えられる（清原賢好と名乗る）、24歳で出家、27歳で自誓受戒して、そののち対馬に渡って35歳で逝去するという彼の生涯を丹念に跡づけている。「第二章 明忍律師の事跡と戒律重視の思想的背景」は、青年期の明忍（清原賢好）が仕えた清原秀賢の日記や、さまざまな記録の奥書などを分析しながら明忍の事跡のさらなる解明を試みたもので、秀賢のもとで書物の筆写・校合を行い、出家後には經典類を次々に筆写していったこと、明忍が戒律を重視するに至った背景には、鎌倉期の高僧明恵の影響があると考えられることなどを指摘している。「第三章 明忍律師の周辺人物について」は、明忍の思想形成に影響を及ぼした可能性のある周辺の人々について考察したもので、清原枝賢（秀賢の祖父）や、細川忠興夫人（ガラシャ）に仕えた「い

と」という女性（秀賢の叔母）がキリシタンとして受洗しており、若き日の明忍（賢好）にも影響を与えて、これが戒律重視の思想につながったのではないかという見通しを述べている。

論文の概要は以上の通りであるが、従来あまり考察の対象とされなかった棄教した日本人キリシタンについて本格的に検討を加えたこと、明忍という律僧の生涯と事跡について史料をもとに詳細に解明したことは高く評価できる。イエズス会の帳簿や、書物や経典の奥書などを丹念に分析していることも特長といえる。また、「ころぶ」「そむく」「つまずく」といった言葉に注目している点も重要で、たとえば「つまずく」という日本語はそのまま使われず「すかんだろ」「えすかんだろ」というポルトガル語が用いられていたというのは、日本と西洋の交流の中での言葉の使用にかかわる貴重な指摘といえるだろう。

キリスト教社会では貞潔や禁欲は無条件で善であるが、当時の日本人にとってみれば違和感のあるもので、ハビアンや禁欲もこれに関連する。一方で仏教界の墮落という現実と直面する中で、明忍のような戒律復興を志す人物が現れる。本論文はこのような社会の状況を具体的にあぶり出し、16世紀末・17世紀初頭という時代、「禁欲」や「戒律」という問題について日本人が主体的に意識するようになったという重要な事実を導き出している。

日本と西洋をまたにかけた広い視野から人々の動向を跡づけた力作だが、論理展開に問題があるように思える。明忍の思想形成にキリスト教が影響しているというのは、あくまでも周囲の状況からみた想定で、実証されたものではない。本論文は日本人がいかにキリスト教という異文化と向き合ったかということを中心とし、第一部と第二部を配置しているが、第二部で検討した明忍の事跡を、キリスト教とのかかわりを軸にして位置づけるというのはやはり無理があり、「禁欲」「戒律」という問題を表に出して、当時の日本人がこれについてどう考え、西洋の思想と関わっていたかということ論じるという形でまとめる方法もあったのではないかと思う。

このような問題点もあるが、広い視野から時代の特徴をとらえた貴重な研究成果といえる。口頭試問（1月27日に実施）においても真摯に対応しており、今後の研究の進展が期待できる。本論文は質量ともに充実したもので、博士の学位を授けるに値するものと判断する。